



3年・ラウンド2(音読) ※同校の3年生は4ラウンド制。

横浜市立横浜吉田中学校 授業者: こまつ あつし 小松篤史先生

使用教材:『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』3(光村図書) Unit 7

休み時間のにぎやかな廊下からは、日本語の声に交じって、中国語の声も聞こえてくる。横浜中華街にほど近い同校は、全校生徒の約半数が、外国にルーツのある子どもたちだ。「英語を共通の言語にして、生徒どうしや、教師と生徒のコミュニケーションをもっと豊かにしたい。そのために、従来のやり方にとらわれず、効果的な学習法を取り入れよう」。そんな考えから、小松篤史先生はラウンドシステムを始めたという。

オールイングリッシュだからこそ全員が参加できる

小松先生の授業はオールイングリッシュで進められていく。他の教科では、日本語の支援が必要な生徒が別教室に行くこともあるが、英語は、クラス全員がいっしょに授業を受けられる。

“Do you know what you’ll talk about today? (今日のトークは何だと思う?)” 授業の冒頭、生徒たちに投げかけると、数名が“Chorus?”とつぶやく。前日の合唱祭で、この3年1組は惜しくも優勝を逃している。しかし先生が、“Some of Class 2 students said, ‘Class 1 will win’.”(「1組が優勝する」と言っていた2組の生徒もいたんだよ)” そう話したとたん、それまで静かに受け答えをしていた生徒たちが一斉に「おっ！」という声をあげた。生徒たちの気持ちをよく捉えているトークだ。

先生と生徒によるトークのあと、今度は生徒どうしてトークを行う。合唱祭で優勝を逃した気持ちを、英語で表現するのはなかなか難しい。



オールイングリッシュが日常になっている小松先生の授業。

生徒たちが歯がゆい思いをしているところで、先生は、教科書p100「The Chorus Contest」(※1)を開かせた。今のこのクラスにぴったりの内容が書いてあるページだ。ここから気に入った表現を取り入れることで、トークをレベルアップさせていった。



※1 『COLUMBUS 21』p100「The Chorus Contest」合唱祭に関する思い出が書かれた文章。

回数の多さを感じさせない

フリートークのあとは、教科書Unit 7の音読だ。Unit 7の全文をCDで聴いたあと、何度も声に出して読む。

1回目は、CDの音声と同時に音読(読み方の確認もするため、各自小声で)。2回目はCDの音声と同時に大きな声で音読。3～5回目はペアで音読(立ったり座ったり、何らかの変化をつける)。読むことに不安のある生徒もこれだけ回数を重ねると慣れてくる。読み方が少し流れぎみになってくるので、先生は教科書のセンテンス“Taku, you were fantastic.”を板書して、次のように投げかけた。“Which word is important? (大事な言葉はどれ?)” 大事な言葉(このセンテンスの場合“fantastic”)は強めに読むとよいことを全員で確認したあと、6回目の音読を行った。

たくさん音読したあとは、本文をノートに書き写す活動を行う。今日の1時間だけでも、Unit 7全文を、8回も聴いたり読んだり書いたりする活動を行ったことになる。

活用力の伸びは驚異的

授業はいつも、前半はアウトプットの時間、後半は教科書を繰り返し聴いたり書いたりするインプットの時間という組み立てで行われている。



ペアで音読。発音に自信のない生徒には、小松先生が支援に入る。

「機械的に繰り返すだけでは意味がありません。繰り返しイン

プットする場と、それを活用できるアウトプットの場合をセットにするのがラウンドシステムなんです。そうすることで、確かな力になっていきます」(小松先生)。

その確かな力は、市の学習状況調査にもはっきりと表れている。ラウンドシステム導入前は、英作文などの活用問題の正答率の平均が一桁だったのが、導入後は大きく伸びて50～60%になったという。英検の二次試験にも非常に強い。即興で自分の考えを伝える力は抜群だ。

同校のラウンドシステムは今年で3年目。小松先生に、今後の課題についてきくと、正確さにおいて多少の不安があるので、2・3年生は文法の補完を行っているとのこと。校内の定期試験などで多かった間違いを生徒に示し、教科書本文とどこが違うのか投げかけて考えさせる。補完の効果はよく表れているようだが、細かい点をあまり深掘りしすぎると、生徒は気にしてしまい、話す量・書く量が減ってしまう。「今の3年生は、実は2年生のときのほうが話す量・書く量が多かったんです。ここを越えられると、もう一段上にいけると思うんですが……」。そう言いながらも、ラウンドシステムに対する迷いは見られない。

もちろん、同校の教員の中に戸惑いが全くないわけではない。「文法を早く教えてしまいたい」といった声もあがるそうだ。しかし、小松先生は「とにかく2年生の後半まで信じて待つことが大切なんです。そのころに、ラウンドシステムの効果が一気に表れて、子どもたちが見違えるように変わります」と言う。確かな結果が、先生の言葉を見事に裏付けている。



【特集】
ラウンドシステムで
学力が大幅アップ!